

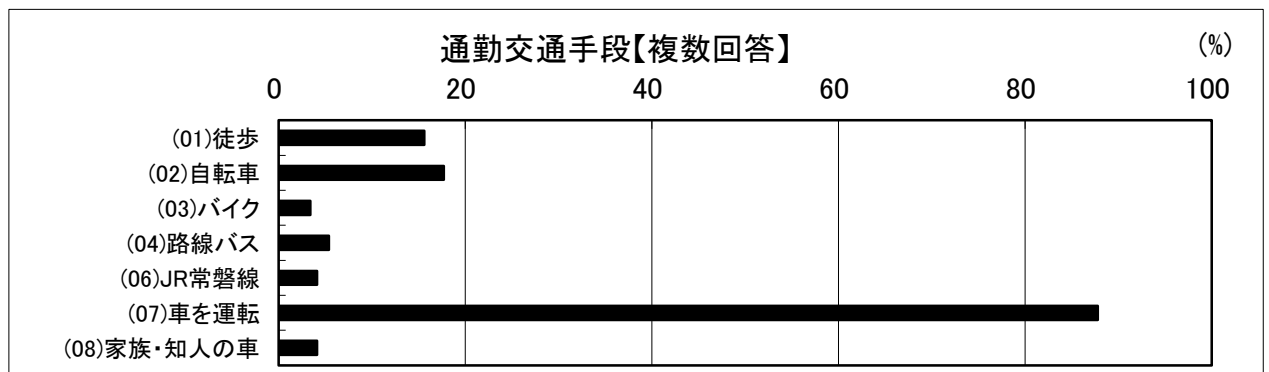
## 企業通勤者を対象としたアンケート分析の結果・速報

### 企業通勤者アンケートの調査概要

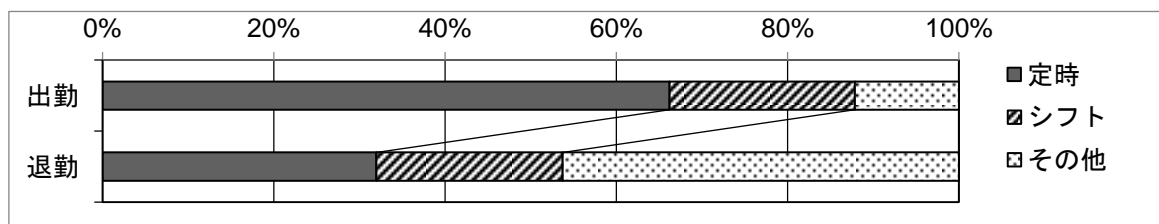
- 配布・回収：平成 27 年 12 月に町から町内中心部に立地する企業に配布・回収を依頼、3 社から計 450 票が回収された。
- 速報について
  - ◇ 回収した 3 社から各 50 票をサンプリングして、計 150 票を先行して入力・集計作業を行いました。
  - ◇ 主要な質問項目の単純集計の結果は別途資料のとおりです

### 通勤の実態

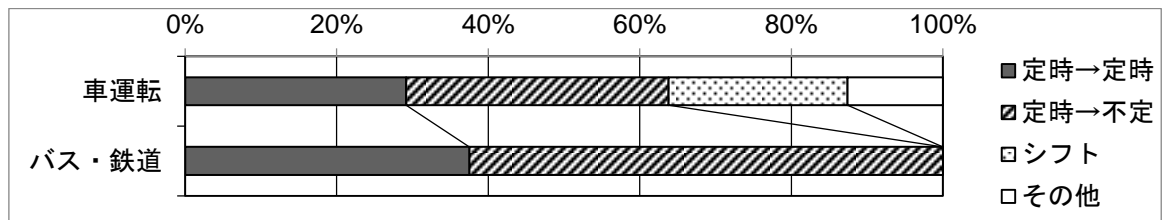
- 現状の通勤での公共交通利用は、JR 利用者は 4%、バス利用者は 5%
- 近距離に居住していて、徒歩や自転車の人も 3 割程度見られた



- 出勤時間は、定時が 65%と最も多い。退勤は時間がばらける傾向にあり、決まった時間の人は 31%。シフト制の人は出勤・退勤とも約 2 割となった

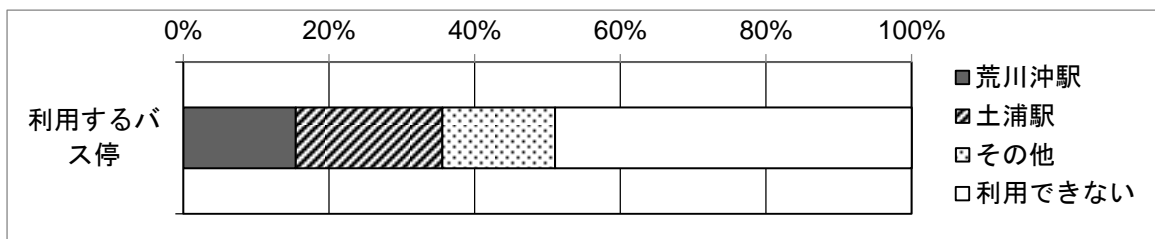
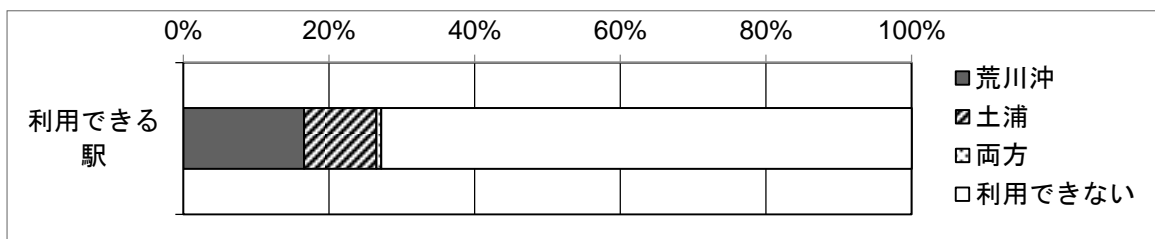


- 出退勤の形態と利用交通手段との間には関係が見られた。シフト勤務の場合には公共交通の利用はまったく見られず、公共交通を利用しているのは出勤が定時で、退勤が定時あるいは不定時の場合のみである。退勤時間が日によって異なっても、公共交通が利用されている場合があることがわかる。

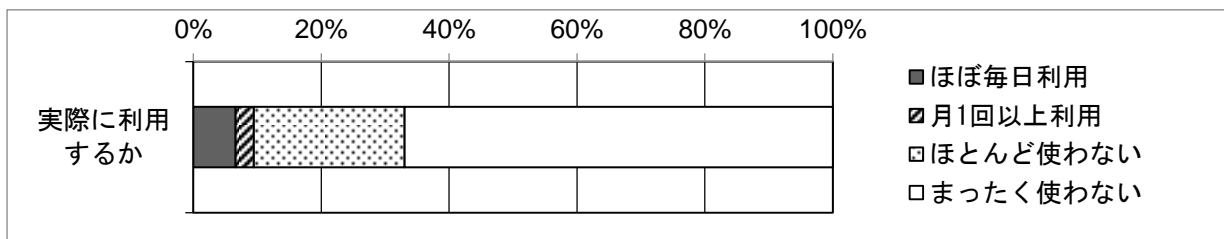


### 通勤で利用できる公共交通

- ・ 通勤の移動で利用できる公共交通があると答えた人は全体の約3割であった
- ・ 利用が考えられる駅では、荒川沖駅は17%、土浦駅は11%程度であり、下りで来る人の割合が高いことが影響していると考えられる
- ・ バスでは、荒川沖駅で乗車または乗換が15%に対して、土浦駅で乗車または乗換が20%となっており、両者の比較では土浦駅路線の方が多く意識されていることがわかる。両駅は通らないがバスでの通勤が考えられる人が15%となっており、おもに阿見町内に居住している人が該当しているものと考えられる。

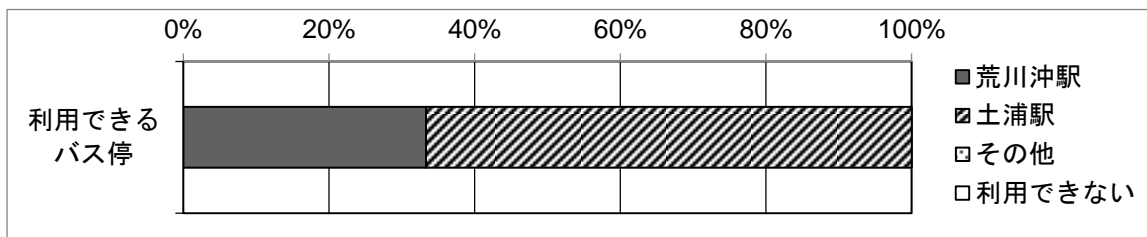
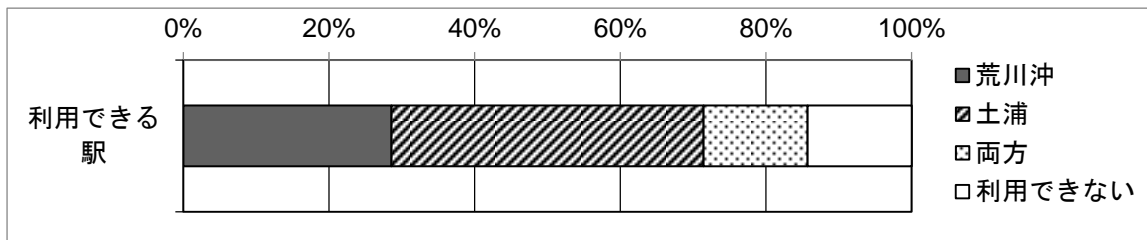


- ・ これらの経路について、「使うことがある」と答えた人は7%に過ぎず、先述の通常の交通手段として使っている割合に比べ、大きな違いは見られない。

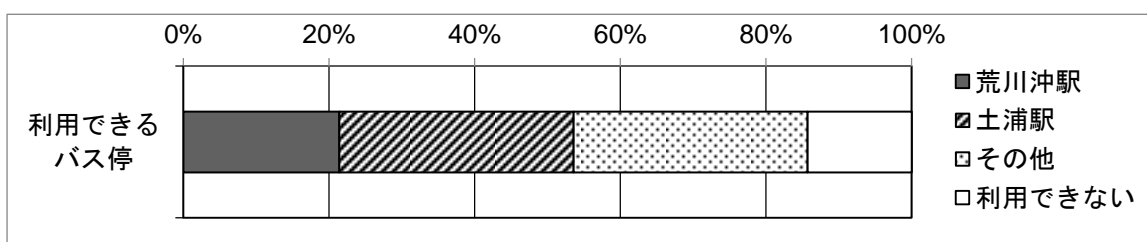


- ・ 「ほぼ毎日利用」と答えた人の、駅、およびバス停は次の通りである。鉄道、バスともに、土浦駅の方が荒川沖駅よりも利用が多くなっている。また、バス停の

「その他」については、該当するものがなく、町内に居住してバスのみでの通勤は実態としてないことがわかる。



- ・ 「できるが、ほとんど使わない」「月1回以上利用」との回答があわせて26%となった。
- ・ これらの人の駅、およびバス停は次の通りである。やはり鉄道、バスともに、土浦駅の方が荒川沖駅よりも利用が多くなっている。また、「その他」のバス停の利用についてもみられる。

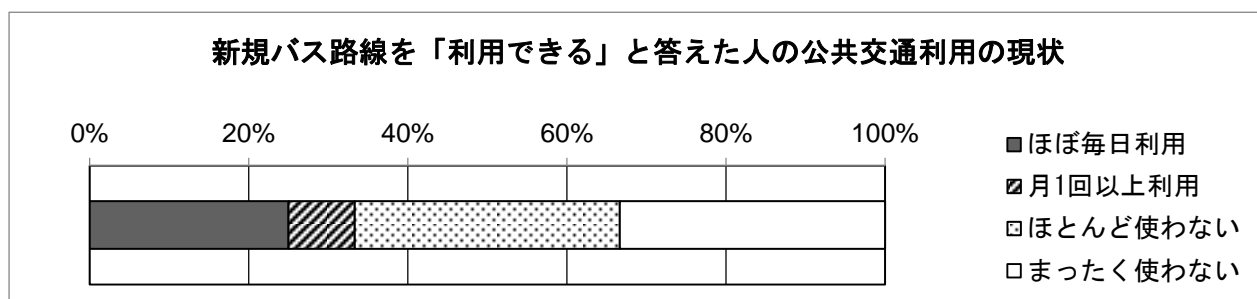
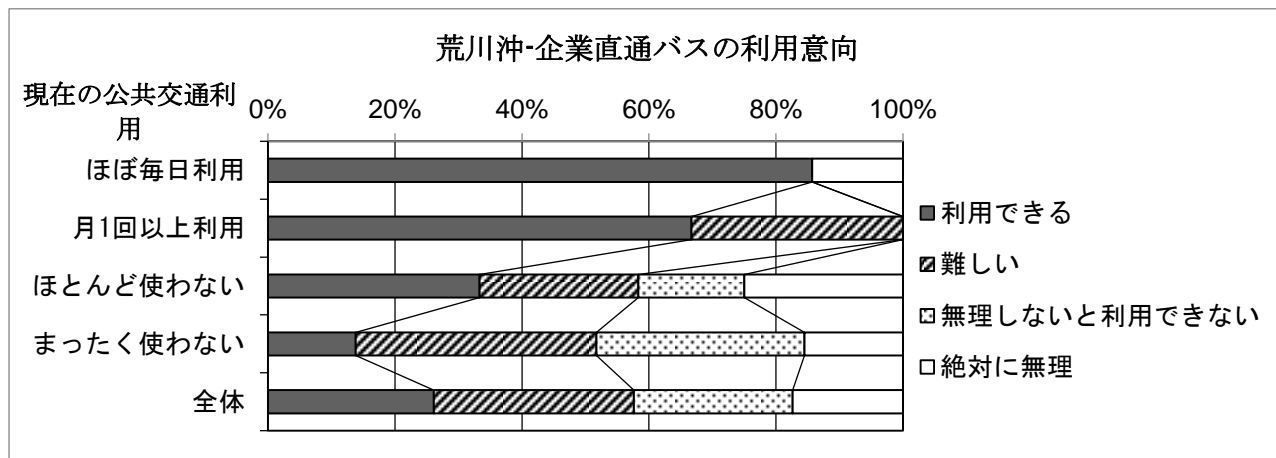


- ・ 以上のことから、現状のバス路線では、荒川沖駅方面よりも土浦駅方面の利用が多く考えられていることがわかった。これは、町内での路線の経由地や、便数・時間帯が、全般的に土浦駅方面の路線の方が便利であることが強く影響していると考えられる。

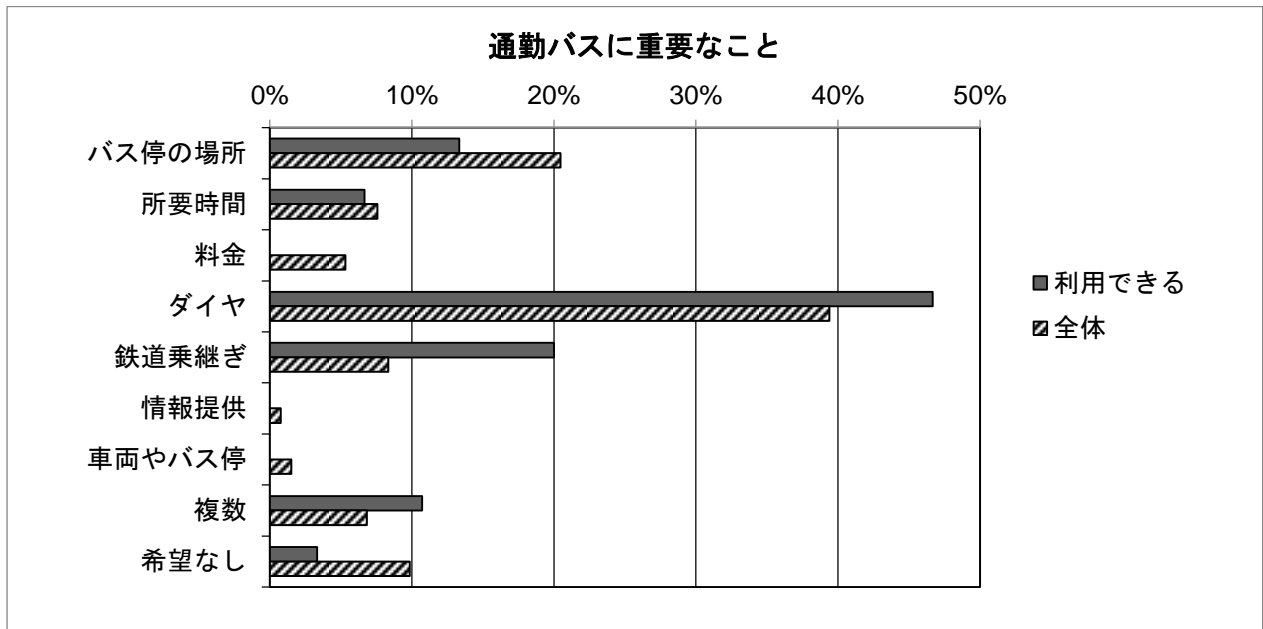
### 新規路線に対する意識

- ・ 荒川沖-企業直通バスについては、約23%が「利用できる」との回答であった

- ・ 利用の意向は現在の公共交通利用との相関がみられる。しかし、現状で公共交通を使わない人が母数として大多数を占めており、これらのうちの2割程度が新規バス路線に意向を示していることから、これらの人の新規利用が期待できるといえる。



- ・ 「通勤バスに重要なこと」を集計した結果が次のとおりである。全体と、荒川沖-企業直通バスについて「利用できる」と答えた人のみの結果の両方を示す。
- ・ ダイヤを指摘する割合が最も高く、とくに「利用できる」と答えた人が大きくなっている。次いで、鉄道乗継ぎが多い。
- ・ これらのことから、鉄道乗り継ぎにも配慮されたダイヤの設定が非常に重要であるといえる。



### 公共交通利用ニーズの考察

- ・ シフト勤務者は公共交通の利用は皆無であり、少なくとも出勤時間が定時である人が、公共交通利用の利用者層、また潜在的利用者層であるといえる。これは今回の集計では全体の8割を占めている。
- ・ 現状の公共交通の利用は、全体の1割程度であり、大部分が自家用車の運転、また近距離で徒歩や自転車だけの利用も見られた。
- ・ 利用されているバス路線は、荒川沖駅方面よりも土浦駅方面の利用が多く考えられていることがわかった。これは、町内での路線の経由地や、便数・時間帯などの利便性で、利用が影響されているためと考えられる。
- ・ 「もし荒川沖-企業直通バスが運行されたら」との問に対して、約23%が「利用できる」との回答であった
- ・ 全体の2割を占める公共交通を「ほとんど利用しない」人の約3割、また全体の7割を占める公共交通を「まったく利用しない」人の1割以上が、直通バスを「利用できる」と答えており、バス運行を検討する上では、これらの人が実際に使うようなバスを検討することが重要であることがわかる。
- ・ 通勤バスに求めることとして、利用意向を示した人についてみた場合に、「ダイヤ」「鉄道乗継ぎ」が大部分であり、これらの検討が重要であるといえる。

# 中学生を対象としたアンケートの素集計・速報

## 中学生アンケートの調査概要

- ・ 配布・回収：平成 28 年 1 月に町から 3 中学校に配布・回収を依頼、1 月 25 日締切で回収
- ・ 素集計速報について
  - ◇ 回収した調査票のうち、3 中学校各 50 票、計 150 票をサンプリングして、先行して入力・集計作業を行いました。
  - ◇ 単純集計として主要な分析結果は別途資料のとおりです

## 中学生アンケートの考察

- ・ 買物やそれ以外の移動では、遠距離は大部分が家族の車によっており、近距離は徒歩・自転車の割合が大きくなるものの、それでも家族の車の利用が最も多い回答になっている
- ・ ただし土浦市内への買物の場合には、全体の約 17%がバスを利用することがあると答えている
- ・ 駅への交通手段としても、約 2 割はバスを利用することがあると答えており、バス路線等への理解があると考えられる。一方、それ以外の回答者はバスに関心がないか、あっても自ら利用しようという意向はないものと考えられる
- ・ 進学後の通学手段については、約半分は何らかの情報を有しているものとみられるが、残りの回答者は十分に情報のない状況にある。また、全体の半数は公共交通があつて家族に負担をかけなくてよいようになることを期待しているが、その一方で、進学先を選ぶ際に通学手段は気にしないものが、約半分を占めている
- ・ 将来の通学時の JR 常磐線利用としては、全体の 2 割が上り、1 割が下りを利用する可能性がある
- ・ 将来の通学時の駅までのバス利用は、駅利用者の 2 割に利用意向があり、全体に占める比率だと 6%程度となる